

はじめに

ドン底からさらに沈み続ける「天井のない監獄」

若い頃は、夢を喰くって生きていた。

自分の人生を振り返り、医師を志した動機や、医学部を卒業後、現職に就くまでの道程を考えると、そんな思いに駆られる。恰好かつこうつけ過ぎ、と言われるかもしれない。しかし、夢を見るのは、すべての若者の特権だと思う。日本のように平和で経済的にも安定した国や地域でなくても、夢を育むことはできる。いや、むしろ荒廃した社会にこそ逞たくましい希望が芽生えると言ってもいいだろう。しかし、その荒廃にも限度がある。

たとえば現代の日本は、第二次世界大戦後に焼け野原の状態から復興した。いまがドン底だ、もう底を打ったと感じることができれば次に向かって通常以上の力が発揮されるこ

とは、人間の生存本能という意味で自然な現象と云っている。しかし、底がまったく見えない状況だとしたら、どうだろうか。底なしの泥沼に際限なく沈み続けていくような状況で、人間が希望を抱けるだろうか。

わたしは現在、UNRWA (United Nations Relief and Works Agency for Palestine Refugees in the Near East = 国連パレスチナ難民救済事業機関。通称ウシルワ) で保健局長という立場で働いている。UNRWAでは約五五〇万人のパレスチナ難民を支援の対象としているが、彼らが生活している地域、なかでもガザの状況は、まさに「際限なく沈み続けている」と言っている。

UNRWAという名をはじめて知った読者もいるかもしれない。この組織について、簡単に説明しておこう。

UNRWAは一九四九年の国連総会で創設が採択され、一九五〇年から活動が続いている。パレスチナ難民への支援の主な内容は医療・教育・社会福祉で、活動の範囲はヨルダン・レバノン・シリア、さらに、東エルサレムを含むヨルダン川西岸とガザの両パレスチナ暫定自治区に及ぶ。

今年二〇一九年で創設七〇周年を迎えるが、創設時に設定された活動期間は三年だった。七〇年の間、活動期間は三年単位で延長に次ぐ延長を繰り返してきたのだ。つまり、UNRWAの創設時、国連はパレスチナ難民の問題を「三年で解決できる」と考えていたことになる。しかし、七〇年が経過しても問題は解決されるどころか、むしろ混迷の度合を深めている。

パレスチナ情勢については、歴史的背景も含めて追って詳述するが、ここではガザがイスラエル政府による厳しい経済封鎖下に置かれていることを述べておきたい。

ガザは、かつて世界有数のイチゴの産地として知られていた。ガザ産のイチゴは、ヨーロッパにも輸出され、人気のブランドであったという。ガザの主要な産業であり、外貨獲得の貴重な手段でもあった。わたしも食べたことがあるが、甘味と酸味のバランスが絶妙である。

しかし、現在はガザにある空港は破壊され、港湾からの輸出も禁じられているため、せっかく生産したイチゴも輸出することができない。エジプトに通じる陸路も検問所が閉じられてきた。まさに、ガザは「陸の孤島」と言うべき状況に置かれているのだ。いや、陸

の孤島どころか「天井のない監獄」という辛辣な表現すら存在する。この状況について、国連は二〇一二年に「二〇二〇年には人が住めなくなるのではないか」という強い警告を含めた報告書を出している。

健康の定義

こうした状況で、パレスチナの若者たちに自殺者が増えていることを、ロンドンに本社を置くアラビア語高級紙『アル・ハヤト』が伝えている（二〇一四年一月二二日付）。記事によれば、ヨルダン川西岸における自殺の件数は二〇一二年の五件から翌二〇一三年には一九件、さらに二〇一四年は一月はじめの時点で二七件と報告している。

自殺者が増えれば、その死を悲しむ家族や友人たちも社会に増加する。しかし、イスラム教はユダヤ教やキリスト教と同様、教義で自殺を強く戒めているので、そうして悲嘆する人たちも多くを語りたがらない。したがって、本来は深刻に懸念されるべき自殺という問題も、社会で表面化しづらいのが実状だ。

WHO（世界保健機関）は、一九四六年に制定されたWHO憲章の冒頭で、健康の定義

について以下のような考えを示している。わたしもWHOからの出向という形でUNRW
Aで働く身である。

“Health is a state of complete physical, mental and social well-being and not merely
the absence of disease or infirmity.”

この定義はWHOの普遍的な理念であり、日本語に訳せば次のようになる。

「健康とは、肉体的、精神的に、および社会的にも完全に満たされている状態であり、単
に疾病または病弱の存在しないことではない」

近代以前は、健康と言えば単に肉体面で病気が存在しないことだった。その後、うつ病
が「現代病」として社会問題にもなっているように、精神面の健康が定義として新たに加
わった。また、一九九八年にはWHOの委員会で、人間の尊厳の確保や生活の質を考える
ために必要で本質的な要素として「spiritual」（霊性）という文言を加えることも検討され
た。これは、まだ実現していないが、霊性という単語をさらに平易な言葉で言えば「今日、
生きていることに感謝し、明日に希望を持って生きられる状態」のことだろう。

それは、ガザが置かれている状況とは一八〇度逆の世界。現在、そこに住んでいる人た

ちが求めても手に入れることの叶^{かな}わない価値観と言える。

病気ではなくても元気がない人は健康ではないのだから、UNRWAの保健局長であるわたしの仕事も、単に病気の治療をするだけではない。希望を持つことが難しいガザの社会と向き合いながら、その住民たちの健康を普段の生活から考えることが求められるのである。

米国からの支援打ち切りで医薬品の購入が一時困難に

パレスチナを取り巻く国際情勢の変化は、わたしが働くUNRWAにも影響を及ぼすようになってきている。現在、直面しているもつとも深刻な問題は、米国からの拠出金の凍結、そして打ち切りである。

二〇一七年にドナルド・トランプ大統領が誕生すると、米国政府は在イスラエル大使館をテルアビブからエルサレムに移転することを発表した(二〇一八年五月に移転完了)。そして、二〇一八年一月には米国からUNRWAへの拠出金の半分以上が凍結されることとなり、さらに八月にはUNRWAへの支援の全面打ち切りが発表されたのだ。

米国は歴史的にUNRWAの最大の支援国であった。これまでUNRWAの予算の約三割が米国からの拠出金によるものだった。二〇一七年の実績で言えば、米国の拠出金は三億六〇〇〇万ドル（一ドル＝一〇円換算で約三九六億円）であり、その支援打ち切りはUNRWAの運営に関して大きな危機となった。さらに、UNRWAへの拠出金とは別建ての、パレスチナ自治政府に対する約二億ドルの経済支援も、他の用途に振り替えられることとなった。

UNRWAはパレスチナ難民を対象に、医療・教育・社会福祉のサービスを提供しているが、こういった米国の対応は医療現場で不可欠な医薬品を十分には購入できないという直接的かつ深刻な影響を及ぼしている。

UNRWAは、先に述べたように、当初は三年という活動期間を設定して活動を始めた組織だ。その組織が約七〇年を経ても存在し続けていることは、取りも直さずパレスチナの難民問題が解決されずにいることを意味している。そして、いま、国際社会はパレスチナ問題を「終わり」にしようとしているのか。あるいは、解決を見ないまま、忘れようとしているのか……。

わたしはUNRWAの保健局長としてパレスチナ難民の健康問題に日々携わるひとりの医師であり、政治的解決に向けてはわずかな力すら持っていない。また、本書でも、政治的な意見を述べるつもりはない。ただ、国際社会におけるUNRWAの存在意義を次のように考えている。

「世界はまだ、パレスチナ難民の問題を忘れ去ったわけではない。UNRWAが存在することは、その証だ」と。

そして、若者や子どもたちの夢は、絶望的な「天井のない監獄」にあっても死に絶えたわけではない。

パレスチナ問題に関するニュースは、日本でも報道されてはいる。しかし、そこで実際に生活している人々の「生の声」はほとんど伝わっていないのが現実だろう。医師の仕事は患者の身体からだに直じかに触れることが多い。触診と言って、触れることで患者の健康状態を測る重要な診察だ。当然ながら患者ひとりひとりの肌の温ぬくもりや心臓の鼓動を感じるようになる。そして、彼らがいま、生きているのだということを改めて痛感するのだ。

パレスチナ難民という呼び名で一括ひとくりで語られる彼らは、実際には日々、泣いたり笑っ

たりしながら生活し、それぞれの人生を生きている。五五〇万人という数字で示される数々ではない、罪のない普通の人々だ。

本書では、わたしがUNRWAの活動を通じて毎日接しているパレスチナの人々の生の声々を、日本の読者に届けたいと思う。